地誌研年報10号，2001年3月
ANREG 10, March 2001

インド農村社会変化の再考：「伝統」と「近代」の二分法を越えて

森　　日出樹*

Rethinking Social Changes in Rural India: Beyond the Dichotomy of 'Tradition' and 'Modernity'

Hideki MORI*

目　　次

I．はじめに
II．インドの農村社会変容の諸相
III．「伝統」と「近代」の再検討
IV．おわりに

I．はじめに

インド農村社会の変化の過程は，技術の進歩による農業生産性の向上，商業化と市場経済の進展，伝統的な因習の衰退，政治の民主化，教育の普及などといった指標でもって，「近代化」や「発展」の過程としてしばしば語られてきた。そこでは，「近代化」や「発展」は「変化すべき方向」でもある。しかし，変化の過程がこのように捉えられることによって，インドはいつまでも「先進国」の後を追う「遅れた」国，あるいは，「停滞した」国としてイメージされる。中里（2000）は，マスコミ報道や教育現場で依然として，「伝統的」なものに縛られ，変化のない静的なものとして，インドの農村がイメージされ続けていることに対して批判の目を向け，ダイナミックに変化をとげている農村像を積極的に描いていく必要性を訴えている。しかし，いくらダイナミックに変化をとげている農村像を積極的に描いてみても，もし，上述したような変化の図式でもって変化の過程を描いてしまうなら（イメージしてしまうなら），「停滞した」インド農村というイメージは払拭することができても，「遅れた」インド農村というイメージは払拭されないまま残ってしまうことになるだろう。

*松山東雲女子大学人文学部； Faculty of Humanities, Matsuyama Shinonome College

インドに限らず第三世界の社会変化は「近代化」や「発展」といった概念（たとえ，明言されなくとも，そうした概念を前提とした語り）によって捉えられる傾向にあると言える。そこでは，（西洋的な）「近代化」がどれだけ達成されたかによって社会の「発展」の度合いが測られ，そうした「発展」とともに「伝統的」（「土着的」）とされている制度や価値観が「衰退」「消滅」していくと考えられ，「発展」の図式に合わない事象は「伝統的」なもの（「土着的」なもの）の「名残」「残存」と見なされるのである。この「伝統的」社会から「近代的」社会へ「発展」するといった西洋中心主義的（先進国中心主義的）発展観を前提とした語りが，「第三世界」をいつまでも「遅れている」「後進」の位置に留め置き，先進国と第三世界との力関係の再生産に加担していることは言うまでもない。

インドの農村社会変化を描く場合においても，記述によって作り出される（あるいは，その記述を成り立たせている）力関係に研究者が無頓着ではいられない。今後の新たなインド農村像（さらには，第三世界の農村像）の構築に向けての予備的な作業として，本稿では，上述のような問題意識から，「伝統」と「近代」，「発展」といった概念の根本的な見直しを通して，新たなインドの農村社会変化の捉え方（描き方）を提示することにしたい。

II．インドの農村社会変容の諸相

確かに，近年のインド農村社会の変化の諸側面は，「伝統的」なインド農村が「近代化」され，「発展」しつつあることを示しているかのようである。少し例を挙げてみよう。

例えば，まず，農業生産に関して見てみると，周知のように，1960年代後半に始まる「緑の革命」は農業の生産性を飛躍的に向上させた。最近の全インドの州レベルのデータを分析した研究によると，1980年代になって，それまで農業生産の成長率が伸び悩んでいた諸州（特に東部インド）にも「緑の革命」が広がり，新技術の導入や生産性における地域差は縮小してきたことがわかる。また，特に1980～90年代にかけては，作付けパターンにも大きな変化が見られ，商品作物への切り替えが一層進んできたとされる（Balla and Singh，1997）。

土地所有に関しては，全国標本調査（NSS）の調査結果が示すように，大土地所有世帯の割合は減少してきており，それとは対照的に，1ヘクタール以下の小規模土地所有世帯の割合が増加してきている[1)]。

農業生産関係では，生産性の向上，商品経済の進展，農外就業機会の増加とともに，借金などで雇用主の土地に縛られていると同時に雇用主から生活面での様々な保護を受けているような農業労働者（特定の雇用主のもとで長期的に働く労働者）が減少し，雇用主と

上述のような関係がほとんどない（雇用主との関係が比較的短期的な）農業労働者が増加する傾向にあり，いわゆる従来の「伝統的な」パトロンークライエント関係が希薄化してきた[2)]。筆者が調査した西ベンガル州の農村においても農業労働雇用者と被雇用者との関係，地主と小作人の関係において，同様の傾向が見られた（森，1997）。ところで，農外就業機会（非農業従事者）の増加は，農村労働市場のタイト化や，それによる農業労働者の実質賃金上昇をもたらす要因としても指摘されている（Harriss，1992；Kapadia and Lerche，1999）[3)]。

こうした経済的な変化と同時に，政治的環境の変化も，貧困層，さらには，農民の地位向上を促してきたと言える。例えば，1970年代末よりパンチャーヤト制度の活性化に取り組んだ西ベンガル州では，村内政治の民主化が促進され，貧困層の発言権・交渉力が強化された（森，1997）。その後の各州でのパンチャーヤト制度の整備，そして，93年の憲法改正を受けてのさらなる整備は，地方政治・村内政治の民主化・住民参加，農村貧困層・弱者層の社会的地位の向上に多かれ少なかれ貢献するものと思われる[4)]。

最後に，カーストに関しても，その儀礼的規制が弱まってきているということは，これまでの村落研究でしばしば指摘されてきた。それとともに，カースト集団間の関係はヒエラルキカルな序列関係や相互依存的関係という側面を弱めてきた。また，カースト集団の枠を解体する動きとして，カースト集団内部での経済的地位の多様化も生じてきた[5)]。

さて，以上述べたようなインド農村社会の変化の側面は，先に触れた「近代化」・「発展」と総称されるような変化の図式に矛盾なくおさめてみることができる側面である。あるいは，言い方を換えれば，そうした変化の図式にのっとった社会変化の記述でもある。しかし，いわゆる「近代化」，あるいは，西洋中心主義的な「発展」の図式からは矛盾するような現象も先に示したような農村社会変化のなかで生じている（生じてきた）のも事実である。そうした現象のすべてをここで示すことはできないが，筆者が自らの調査で出くわした事例を中心に，農業生産関係や村内政治に限って，2，3の事例を挙げてみることにする。

確かに，農外就業機会の増加，さらには，（急速な機械化によらない）農業での生産性向上とそれにともなう村内での就労機会の増加は，農業労働者の交渉力を以前よりは強化させ，また，農村での商品経済の進展をもたらしてきたと言える。こうしたことが従来の農村内のパトロンークライエント関係を解体させる大きな要因となっていると考えられる。しかし，当然のことながら，パトロンークライエント関係が解体するのは農業の技術的要因や経済的要因のみからではない。そこには，雇用主と労働者を取り巻く政治的状況やイデオロギーも大きく関わっている（Lerche，1995；Platteau，1995）。その結果，上述の

ような労働市場や経済的条件であっても，土地所有者は，借金で特定の労働者を束縛したり，圧力をかけることによって，あるいは，賃金を上げたり労働条件をよくすることなどによって，パトロンークライエント関係を再び築き上げることもある（Lerche，1995）。

また，「近代化」のプロセスに見られる経済的・社会的変化は，「伝統的」とされる共同体的な倫理観をノスタルジックに表明させる契機にもなる。西ベンガル州の村での筆者の体験を例にとってみよう。西ベンガル州では，1960年代後半の左翼勢力率いる農民運動の過激化，さらに，1977年の左翼戦線（Left Front）政権の誕生などを契機に，小作人や農業労働者をはじめとする貧困層の発言力が強まった。また，筆者の調査村では，1980年代後半より，灌漑の整備と共に乾季での稲作（ボロ作）が急速に普及し，米の二期作が当たり前のように行われるようになった。多くの小規模土地所有者や土地無し層がボロ作に乗り出すようになり，地主・小作関係では，かつての刈分小作にかわって，ボロ作のみの短期の現金による土地貸借契約が一般的となった。これらの政治・経済的環境の変化のなかで，貧困層の社会的地位は以前よりは上昇したが，それと共に，雇用主や地主はパトロンとしての役割を担うことを避けるようにもなってきた。その結果，地主・小作間，あるいは，雇用主・農業労働者間には，地主・雇用主が小作・労働者に提供する生活面での援助（保護）や借金，地主・雇用主に対する小作・労働者の従順な姿勢，両者の長期にわたる関係などといったパトロンークライエント関係を特徴づけるものはあまり見られなくなってきた（森，1997）。

こうした近年の農村を取り巻く変化のなかで，農業労働者や小作人（短期土地借入者）が，最近の雇用主や地主は経済的な支援をしてくれないと，不満を漏らすように語るのを調査期間中に筆者は耳にしたことがある。また，農業労働者を多数雇用する大土地所有者が，昔の労働者はよく雇用主の言うことを聞いて，争いもなく，村の調和もとれていた，と昔を懐かしむように語るのを耳にしたこともある。あるいは，最近の風潮や政治活動は，利害の対立ばかりが強調され，村人の間に不信感を植え付けていると批判する村人の声も聞いたことがある。これらの発言には，村人同士の相互扶助や調和を求める共同体的な価値観が表出されている。

また，筆者の調査した西ベンガル州では，パンチャーヤトの整備にともなう農村住民の政治への参画，村内政治の民主化が進んできたが，村議会（gram panchayat）議員や党の指導者との個人的な縁故による便益の供与を期待する風潮もある。村人たち，特に，村議会を通して実施される政府の貧困緩和政策の対象者であるような貧困層は，新しく台頭してきた村内の政治指導者と個人的な繋がりをもつことが貧困緩和政策の受益者となるために必要なことだと考えている。「議員に頼んだにもかかわらず」（個人的な）便益にあず

かれなかったという不平・不満の声は筆者の調査地でもよく耳にした。すなわち，政治指導者とのパトロンークライエント関係，あるいは，力のある者が貧しい者に振る舞って当然といったモラルエコノミーとも呼べる倫理観で，村内政治のあり方がイメージされている。しかし，その一方で，受益者になれなかった者は，他の者が受益者になると，そこには何か個人的な縁故や不正が働いた結果だと理解して，政治家に対する批判や受益者への皮肉を露わにしたりもする。ここでは，近代民主主義政治の原理原則に基づく「公正さ」を理由に，政治家や党の指導者たちが批判されるのである（森，1997；Williams，1997）。

以上，インド農村社会変容の過程で見られる，「近代化」や「発展(開発)」の図式とは矛盾するようにも見える現象の若干の例を示した。これらは，限られた事例とはいえ，一般に流布している「伝統」から「近代」へといった「発展」の図式の再検討を促す上で，十分なヒントを与えてくれるものであると言える。次章では，インドにおける「伝統」と「近代」の問題について若干の考察をし，本章で挙げた事例に関して，従来の「伝統」と「近代」の図式に縛られない解釈の可能性を提示してみたい。

III.「伝統」と「近代」の再検討

1．インドにおける「伝統」と「近代」

Inden（1990）は，独立後のインド農村研究の進展にも関わらず，インド村落を見る際の前提となっているものは依然として変わらないと述べている。彼はそうした前提の1つとして本質主義（essentialism）を挙げている。これは，静的な性質・構造といった意味での本質が人間の作り出す諸制度にあるとする考え方，すなわち，古代社会，あるいは，近代社会をそれとして特徴づけるものが存在するという考え方である。そこでは，「伝統」と「近代」はそれぞれ異なる特徴を持つ本質的に異なった性質のものとして認識される。Inden はこの「伝統」と「近代」の二分法によって，両者が進化論的図式の中で目的論的に関係づけられてきたこと，すなわち，「伝統」から（西洋的）「近代」へ移行するという前提のもとで変化の過程が描かれてきたことを批判している（p.157-159）。

インド研究における「伝統」と「近代」の二分法に対する批判は，なにも Inden に始まったわけではない。1960年代末に既に，Rudolph and Rudolph（1969）は，「伝統」と「近代」を相互に排他的なものとみる二分法を前提とした伝統社会や近代社会の捉え方を批判し，両者の関係を弁証法的に捉えることによって，西洋が経験した近代化のプロセスとは異なる近代化のプロセスをインドに探ろうとした。また，「伝統」と「近代」の二分法に基づく他者の研究において，西洋人が自分たち（近代）とは反対のものとして他者

（伝統）を描くことによって，自分たちが近代的であるというイメージを強化させてきたことも彼らは指摘している（p.9)。しかし，こうした「伝統」と「近代」の二分法に対する挑戦や，サイード（1986）の議論を彷彿させるような問題点の指摘にもかかわらず，Rudolph and Rudolph は伝統的とされる社会の中での「伝統」と「近代」を，それぞれ「優勢な」価値（傾向）と「潜在的，逸脱的，少数派の」（あるいは，特別で，例外的な）価値（傾向）として対比させている（p.5, 7, 11)。こうした議論は，「近代化」の過程を，劣勢なもの（「近代」のモデルに合致するもの）が優勢になっていく過程（すなわち，劣勢なものがどの程度優勢になったのかといった程度の問題）としてイメージさせてしまう。そこでは，「伝統」と「近代」のそれぞれを特徴づける固定的な要素・性質の存在が前提とされているのである。Rudolph and Rudolph も，伝統と近代の二分法とそれを支える両者の本質主義的な捉え方から完全には自由になっていないと言える。

それに対して，Inden は，歴史を作っていくものとしての個人の行為（のもつ力）への関心から本質主義そのものを問題にする。彼によれば，本質主義では，社会の人々によってとられる特定の行為は，本質主義的な観点から捉えられた社会的現実をどの程度表しているものなのか，あるいは，そこからどの程度逸脱しているものなのか，といった具合に理解され，社会的現実を構成している（constitutive）ものとして人々の行為が捉えられることはない。また，こうしたことと関連して，本質主義の認識論では，村人のディスコースにはほとんど関心が払われないと Inden は指摘する。すなわち，そこでは，村人の声は単に「データ」を得るための媒介として，あるいは，合理的な科学的言語に翻訳されるべき虚偽意識などとして扱われてしまうのである（p.159)

また，本質主義と並んで，Inden は，決定論（determinism）もインド村落を見る際の前提となっているとして批判している。決定論とは，ある特定の（経済的，政治的，社会的などの）要因が特定の結果をもたらすとする考えである。彼によれば，こうした考えも，自らの社会を構築する行為者の選択を認めていないという点で，批判されるべきものとされている。

どうやら住民の主体的な像を浮かび上がらせることに，すなわち，本質主義や決定論を乗り越えることに，「伝統」と「近代」の二分法から解放されるための方策があるようだ。

そもそも，「伝統」の概念が揺らいでいる今日，無反省にインドの「伝統」を口にすることはできない。インド社会に関しては，その「伝統」の見直しが歴史学や人類学を中心に行われてきた。農村社会に関しては，例えば，かつてインドの農村社会の古来からの特徴として考えられてきた村落共同体が，実は植民地行政の影響で（効率よく徴税するための連帯責任制などによって）作られてきたものだとも言われている（小谷，1982)。これ

は，前近代的な農村社会が何らかの共同体的特徴を持っていて，資本主義化・近代化と共にそうした共同体的関係が解体していくといった歴史観がすでに通用しなくなってしまったことを示している。同様に，これまでインド農村社会の伝統的なシステムと考えられていたジャジマニ・システム（カースト分業に基づく村落内の閉じた交換体系）も，植民地支配下で見られるようになった，あるいは，研究者のオリエンタリスト的認識によって捏造されてきた，という側面もあること，また，決して全インド的に見られるようなものではなく，たとえある村や地域に存在したとしても，それはその村や地域の経済活動の1側面にしか過ぎず，経済活動全体を包摂するシステムではないといったことが明らかになっている（Fuller，1977，1989；Mayer，1993）。このような「伝統」に対する見直しは，無反省にインドの「伝統的」なシステム（あるいは，社会構造，価値観）を語ることを許さない。まして，そうした「伝統」があったことを前提に，「伝統的」なシステムや構造や価値観から「近代的」なそれに移行してきた（している）というような記述はともすれば全くの虚構になってしまう恐れもある。

さらに，今日，これまでの「発展(開発)」の考え方，あるいはその根底にある発想から決別しようとする動きや[6]，「発展（開発）」に関する言説のもつ政治性を批判的に考察する動きも出ている。Escobar（1995）が指摘するように，「発展（開発）」という言葉（概念）は，オリエンタリストの言説と同じように，発展途上国（第三世界）というものを創り出し，先進国がそれをマネージするための権力（支配）のメカニズムとしても働いてきた。こうした「発展（開発）」の正体が明らかになった今，これまでの発展観を前提とした（あるいは，これまでの発展観に無自覚な）社会変化の記述でよいのかどうかが問われなければならないだろう。

以上のことを念頭に置いて，以下では前章で挙げた事例を解釈してみたい。

2．「伝統」と「近代」の二分法の乗り越え

まず，農業生産関係におけるパトロン－クライエント関係の再構築に関してはどうだろうか。前章では，近代的な生産関係が作られる同じ経済的条件でも，土地所有者と農業労働者との間にパトロン－クライエント関係が構築されうることを紹介した。そこには，経済的要因（労働市場）以外に，政治的，社会的要因も大きく作用し，その中での行為者の様々な選択（アクション）があることを前章の事例は示していると言える。農村の経済的な「発展」の要因（生産性の向上，就労機会の増加，労働市場のタイト化）は，決定論的に（機械的に）パトロン－クライエント関係を消滅させるとは限らないのである。また，こうした条件のもとで作られたパトロン－クライエント関係は，「伝統的（因習的）」な

農業生産関係の「存続」や「残存」ではなく，雇用主や労働者が新たな経済的，政治的，社会的条件に対応した結果作られていった新たな関係であるとも言える。

次に，農民たちの共同体的な倫理や価値観，あるいは，モラルエコノミーとも呼べるパトロン－クライエント関係の倫理や価値観の表明に関してはどうであろうか。前節で述べたような問題意識に照らしてみると，農民の言説通りに本当に過去にそうした共同体的な倫理や価値観が息づいていて，現在はなくなりつつあるとする解釈に留まることはできない。また，村人たちが依然として伝統的な価値観にとらわれていると，単純に言ってしまうことにも問題がある。このような解釈はいずれも「伝統」から「近代」といった「発展」の図式を引きずっている。村人たちの，共同体的調和やモラルエコノミーの倫理を求める声は，自らの権利を声高に唱えるようになった労働者とそれを支えてきた左翼勢力への不満（大土地所有者の場合）の表明であったり，あるいは，共同体的な倫理ではなく自己利益（効率性・合理性）ばかりを追求しようとする雇用主や地主への不満（労働者や小作人の場合）の表明であったりもする。言い換えれば，「近代的」な価値観や風潮そのものへの抵抗の表現でもある。すなわち，この場合，「伝統的」（と思われている）価値観は，市場経済の進展や政治の「近代化」にともなって，逆に強く表明されるもの，あるいは，創り出されていくものでもあり，農村住民が様々な立場から，そうした価値観を，自らの利益のために戦略的に利用しているというように考えることもできるのである。

ところで，共同体に関する議論の変遷を分析した北原（1996）は，それが実証的にその存在の有無を問う議論から，政策や運動を指導する戦略的な「言説」へと転換していったと指摘している。このような歴史的変遷を受けて，前近代社会に近代社会とは対照的な共同体的社会が存在したという共同体論が実証的レベルの研究で否定された今日，「実証的に言説の非現実性を説くことではなく，共同体を肯定的に評価する言説それ自体の特徴や構造を検討し，それらと社会構造との関連」（p.195）を問う必要性を北原は説いている。彼は農村開発の運動家の言説における共同体論の戦略的な利用のされ方（可能性）について議論しているのであるが，その指摘は，一般の農村住民の共同体的倫理や価値観の表明をどのように捉えたらよいのかを考える上でも十分に示唆に富むものと言えよう。

また，従来のマルクス主義的な階級意識の研究に代わって[7]，農村社会変化や農民の抵抗のあり方を分析する際に，搾取や公正さに対する農村住民自身の意識や価値観に注目する必要があることをScott（1976，1990）が主張して久しい。彼が描いた，農民自身の価値観に基づく経済関係・社会関係のモデル，すなわち，モラルエコノミーを，池田（1988，p.195）が指摘するように，「あらゆる変化に直面した場合に，それに対応するために人々が過去の経験の中から選びとる行為の作法と論理」として捉えると，先のインド農村住民

の言動からも「伝統的」なものを利用して歴史に働きかけようとする（変化に対処しようとする）主体的な行為者の姿が見えてくるのである。

そもそも，Harriss（1994，p.181）も指摘するように，農村社会における階級関係は，（「近代的」な階級や階級意識の概念からだけではなく），カーストや，あるいは，モラルエコノミーとも呼べる共同体のモデルの概念によっても構築されている。「近代的」な階級関係や利害関係に基づくように見える関係性も，しばしば「伝統的」なイディオムを通して解釈されたり，現れたりしているのである。例えば，カーストに関しては，その儀礼的規制（カーストによる差別）の弱まりやカースト集団内部での経済的地位の多様化が，村落社会でのカースト間の相互依存的（序列的）関係を解体させてきたが，その一方で，カースト集団間の関係が競合関係として現れるようにもなってきた。経済的・社会的地位に基づく利害や文化的特徴をある程度共有しているカーストの場合，自らの利益を政治に反映させるため，村落を越えた広範囲での同一カースト集団の結束が強化されることもある。すなわち，カーストは成員のアイデンティティや利益を追求するよりどころとして重要な意味を持つようにもなってきた（Fuller，1997；Sharma，1999）[8]。そのため，政治の場面では「近代的」な階級関係（利害関係）の概念はカーストを通して認識される場合もあり，カーストがしばしば民衆を動員する有効な手段ともなりえるのである[9]。

また，農村住民にとっては，パトロンークライエント関係のイデオロギーも，階級やカーストに基づく利害関係の意識も矛盾なく共存し得る。Lerche（1995，p.498）は，ウッタル・プラデシュ州の調査村の農業労働者（カーストではチャマール）にとって，パトロンークライエントのイデオロギーと労働組合的意識は必ずしも違うものとして意識されていないし，また，パトロンークライエント関係が階級やカーストの利害に基づく行動（闘争）を妨げるものにもなっていないことを示している[10]。以上のような現象を「伝統」と「近代」が峻別しがたく融合している状況として捉えてみることができるだろう。

このような「伝統」と「近代」の融合は，前章で取り上げた村内政治における言説にも現れている。ここで興味深い点は，モラルエコノミーとも呼べるような価値観の表明が見られる一方で，「近代的」ともいえる政治概念をも村人たちが利用していることである。村議会議員は，村人の不平・不満に答える場合に，（自分たちが縁故や個人的な繋がりで便益を供与しているのではなく）「民衆のために」，「貧困者のために」（すなわち，「公正に」）仕事をしているということ，すなわち，近代民主主義政治の論理を強調する。ある意味で，こうした大義名分は，政治家にとっては特定の村人の期待に沿えなかった場合の都合のよい言い訳でもある。前章の例から，政治家が民衆に対してアピールするときにも，また，自らを保身するときにも利用されるこうした概念を，村人自身も自分たちの利益のために

利用していることがわかる。国家や行政，さらには，それに加担する議員や党員（の村人）の側に「近代的」な言説が独占されているのではなく，上から押しつけられているように見える「近代的」な概念を村人自身も巧みに自分のものとして利用しているのである（Williams，1997）。これは，「伝統」を（土着）住民のものとし，「近代」を外からやってくるもの（上から単に押しつけられるもの），とする本質主義的な見方に疑問を投げかけるものでもある。

以上，前章での事例に対して，主体的に歴史に働きかける農村住民の視点（農村住民の意識や価値観の視点）からの解釈の可能性を示した。このような事例の解釈を通して主張されるべきことは，インドの農村社会が単に「伝統」から「近代」へ「発展」しているのではなく，「近代」と「伝統」が（峻別しがたく）融合していること，それと同時に，「伝統的」なものは様々な立場の人々によって表明され新たに創り出されるという側面もあるということである。また，こうした解釈の試みは，「伝統」と「近代」の二分法を乗り越えるための試みでもあった。つまり，「伝統」と「近代」が融合していると述べたが，それは単に，ある社会的事象から，これこれは「伝統的」（「土着的」）なもの，これこれは「近代的」なものといった具合にそれぞれの要素を取り出したり，識別したりすること自体が難しくなっていることを示しているだけではない。（たとえ，取り出したり，識別したりすることができたとしても，これまでの「伝統」・「土着的なもの」と「近代」の概念に無批判なままでは，結局，本質主義による二分法に従った研究者の視点と言わざるを得ない。）むしろ，インド農村社会の現状を「伝統」と「近代」のハイブリディティ（異種混淆され別の新しいものが生じていること）を特徴とするポストコロニアル状況として捉え直すことによって，西洋（あるいは「先進諸国」）がもたらし，「近代」と「伝統」（「土着」）の二分法（本質主義）を生み出してきた植民地主義的言説，さらには，開発（主義）の言説を乗り越えようとする試みを意味しているのである[11]。また，農村住民によって「伝統的」なものが表明されると述べたが，それは，農村住民の言説を二分法（本質主義）に基づく戦略的な抵抗として捉え[12]，そうした戦略的な言動の展開を，植民地主義的・開発主義的な言説が固定化させてきた「伝統」（の側）と「近代」（の側）の力関係（意味内容）が内側から突き崩されていく過程として解釈していこうとする試みを意味している。そして，これらのことは，これまでの植民地主義的言説や開発の言説のもつ政治性（研究者と研究対象者との間の力関係）に研究者が正面から向き合わなければならないことをも意味しているのである。

IV. おわりに

地理学においても，第三世界の地域研究（地誌研究）に関する議論が高まり，新たな第三世界の地誌記述に向けた取り組みが始まっている[13]。そうしたなかで，「これまでの第三世界の地誌がしばしば，客観的観察者の名の下に，無意識のうちに先進国の基準，また，為政者や計画者といった『強者』の立場から地域の特質を描いてきたのではないかという反省」（熊谷，2000，p.iii）も出てきている。確かに，これまでの地理学での地域研究・地誌研究に関しては，その技術的な方法論や地域に関する認識論についての議論は行われてきたものの，熊谷（2000，p.iv）が指摘する「第三世界の地域研究者としての私たちの『位置性』」については，ほとんど議論されてこなかったと言える。

方法論・認識論に関する議論は当然大切ではある。しかし，これまでの地理学での地域研究や地誌（の記述や方法）に対する最近の批判や危機感の表明（内藤，1990；熊谷，1996），あるいは，地誌の再検討（西川，2000）などで指摘されていることの数々を念頭におくと，方法論・認識論のレベルだけでは現在の第三世界の地誌研究（地理学の地域研究）の根本的な変革は難しいと言わざるをえない。言説のもつ力の正体が暴かれている今日，「地域」（あるいは「他者」）をどのように認識するのか（すればよいのか）といった問題は，「地域」（あるいは「他者」）がどのように作り出されるのか，そして，そこにはどのような力関係が働いているのか（あるいは，それによってどのような力関係が生み出されるのか）といった問題を抜きにして語ることはできない。すなわち，学問としての方法論や研究者の認識を可能にしている力関係，また，そうした認識によって生み出される力関係，すなわち，方法論や認識の政治性に研究者が自覚的になる必要がある[14]。

本稿では，以上のような問題意識を射程に入れたインド農村の社会変化の記述のあり方を提示してみたつもりである。しかし，本稿での議論はまだ予備的な段階でもあり，限られた事例での議論でもあるため，当然のことながら，これから取り組むべき課題は多く残されていると言わざるをえない。本稿では農村住民の主体性に着目することが示唆されたが，様々な立場の農村住民の主体的な働きかけが実際様々な社会的な場面でどのように対立し，あるいは，調停されていくのかといった具体的な過程（すなわち，社会変化の具体的な過程）を描いていくことは今後の大きな課題である。例えば，政府の農村開発政策は独立以来様々なかたちで行われてきており，また近年の経済の自由化促進によるグローバルな市場経済への包摂と情報化はインドの農村部においても進展してきている。このような状況下にあって，農村住民自身も自らの土地（村，地域，国家など）に対するビジョン（像，発展のあり方）を様々な立場から表明し，それにもとづいて行動しているものと

考えられる（こうしたビジョンや行動はハイブリッドな様相を呈しているものかもしれないし，あるいは，本質主義的な「伝統」を戦略的に用いているものかもしれない）。様々な立場や状況から表明される住民自身の描く地域像・地域のあるべき姿や発展観，そして，それにもとづく実践が，対立し，調停されていく過程のなかで生じてくる地域の姿を描くことが，生きた地域の姿を描くことに繋がるのかもしれない。

本稿では，インド農村における社会変化の捉え方を述べたに過ぎない。しかし，こうした捉え方（捉えるための視点）を身につけることが，一方的で暴力的な視線によらない社会変化の過程，ひいては，生きた地域の姿を描くための重要な予備的作業のように筆者には思われるのである。

注

1）1961/62年から1992年にかけての全国標本調査による土地所有の変遷に関しては Sarvekshnan, vol.19, no.2 を参照。こうした土地所有状況の変化の背景には，独立後の土地改革政策，人口増加と相続分割による土地の細分化などが大きな要因として指摘できるだろう。

2）こうしたインド農村のパトロン－クライエント関係（農業生産関係）の変遷過程と農業労働者の状況を扱った代表的な研究としては，Breman（1993）を参照。

3）以上のようなインド農村の経済的環境の変化は農村貧困層の生活をある程度は改善してきたと言える。例えば，「緑の革命」による新たな技術の導入と農業生産性の向上の評価に関しては，それが貧農層の窮乏化，プロレタリア化を促進させるといった批判的な評価が1970年代にはなされたが，80年代になって，そうした窮乏化やプロレタリア化に対して疑問を投げかける議論が出てきている（例えば，Harriss（1991，1992）のレビュー論文参照）。しかし，その一方で，市場（商品）経済の進展，さらには，不十分な農村開発政策（貧困緩和政策）により富裕層と貧困層の不平等の拡大を指摘する声もある（Breman，1997）。また，女性の視点から見れば，「緑の革命」による農業生産性の向上や農業生産関係における変化は必ずしも解放の過程とは言えない場合もある。男性の労働者が農業部門から非農業部門へ移行する一方で，女性（妻）たちが，逆に男性（夫）の代わりとして，雇用主の土地に縛られる農業労働者になってしまうという事例も報告されているからである（da Corta and Venkateshwarlu, 1999）。経済発展や開発政策の実施にともなうインド農村社会を取り巻く環境の変化が農村貧困層や社会的弱者の社会経済状況に与える影響については，様々な視点から考えて見た場合，必ずしも楽観視できない側面をもっているということを，ここで指摘しておく必要があるだろう。

4）独立後からのパンチャーヤト制度の展開については，井上（1998）に詳しい。

5）これまでのカースト研究をレビューし，近年のカーストの変容やその表出のされ方をまとめたものとして Fuller（1997）及び Sharma（1999）を参照。

6）例えば，こうした動きの代表的なものとして，ザックス（1996）参照。

7）従来のマルクス主義的な農村社会経済変化の研究では，農業の資本主義化や商業化が農業生産に及ぼす影響やそれにともなう農民の階級形成といった問題に取り組んできたが，Harriss（1991，p.16）が回顧するように，こうした研究では，農村住民自身のイデオロギーや意識にほとんど関心が払われてこなかった。そこでは上述したような農村住民の意識や価値観は，階級意識が十分に育っていない結果，あるいは，虚偽意識として片づけられ，その社会の「未成熟」さが再認識されるだけである。しかし，サバルターン研究グループの歴史学者たちの登場などによって，1980年代になってからは，それまでのマルクス主義的研究の伝統が見逃してきた文化・政治の問題（一般民衆，特に，下層階級の意識やイデ

オロギーの問題）が積極的に取り挙げられるようにもなってきている。

8）もっとも，こうしたことは地域によってかなりの相違があり，インドの全般的な傾向として一概には言えない。例えば，西ベンガル州などは，比較的広範囲な地域にわたって政治・経済的な利害を共有するようなの１つのカーストはほとんど存在せず，そのため，民衆のカーストによる政治的な動員はほとんど見られない。

9）例えば，ウッタル・プラデシュ州では，1980年代後半より，反高カーストとかつての不可触民の優遇を謳った大衆社会党 Bahujan Samaj Party（BSP）が，低カーストの党として農業労働者をはじめとする貧困層を動員することに成功し，1995年にはBSPの州政府を実現させたことは記憶に新しい。

10）歴史学の分野では，例えば，19世紀末から20世紀前半のカルカッタのジュート工場で働く工場労働者に関するChakrabarty（1989）の興味深い研究がある。彼は，労働者たちが伝統的なパトロン－クライエント関係のモデルや共同体意識にもとづき，労働組合組織の指導者や工場経営者との関係を築いたり，集団的行動（闘争）を起こしたりしていたことを示してみせている。

11）こうした議論は，インドの農業・農村開発過程におけるハイブリッドな言説や実践の記述（概念化）に取り組んでいるGupta（1999）によるところが大きい。

12）従属的立場にある人々がしばしば自らの「伝統的」な「固有の」文化や価値観の名の下に，植民地支配や「近代化」や「開発」に抵抗してきたことはよく知られている。従属的立場にある人々（サバルターン）は支配者がもたらした本質主義的な言説のなかで自らを主体化させていくが，そうした本質主義を支配からの解放のために戦略的に利用することもできる（Ashcroft, et al., 1998, pp.77-80.）。

13）例えば，熊谷・西川（2000）におさめられた諸論考は，本稿での議論を展開する上で大きなヒントを与えてくれた。特に，トレス海峡諸島の地域社会を扱った松本（2000，pp.109-130）の論考は，近代資本主義システムの拡大過程と「伝統」の問題を地域住民の主体的な関わりを通して探っていこうとするもので，本稿の議論にとって大変参考になる。

14）こうした問題意識は，サイード（1986）のオリエンタリズム批判以来，社会科学の中である程度定着してきたと言える。例えば，太田（1998）は異文化理解の認識論ではなく，「発話をめぐるパワー論」としてのオリエンタリズム批判（オリエンタリズムの政治性批判）を文化人類学批判として読むことによって，文化人類学の再想像をはかろうとしている。

文　献

池田寛二（1988）：モラルエコノミーの射程．思想，773号，pp.175-201.

井上恭子（1998）：インドにおける地方行政－パンチャーヤット制度の展開．アジア経済，vol.39 (11)，pp.2-30.

太田好信（1998）：『トランスポジションの思想－文化人類学の再想像』世界思想社，284p.

北原淳（1996）：『共同体の思想－村落開発理論の比較社会学』世界思想社，220p.

熊谷圭知（1996）：第三世界の地域研究と地誌学－その課題と可能性．地誌研年報，vol.5，pp.35-45.

熊谷圭知（2000）：はじめに．熊谷圭知・西川大二郎編：『第三世界を描く地誌－ローカルからグローバルへ』古今書院，pp.i-iv.

熊谷圭知・西川大二郎編（2000）：『第三世界を描く地誌－ローカルからグローバルへ』古今書院，263p.

小谷汪之（1982）：『共同体と近代』青木書店，215p.

サイード，W.エドワード（今沢紀子訳）（1986）：『オリエンタリズム』平凡社，424p.

ザックス，ヴォルフガング編（三浦清隆他訳）（1996）：『脱「開発」の時代：現代社会を解読するキイワード辞典』晶文社，396p.

内藤正典（1990）：地理学における地域研究の方向．地理，vol.35 (4)，pp.33-42.

中里亜夫（2000）：インド農村の貧困と動態-地理教育の偏見とその克服．熊谷圭知・西川大二郎編：『第三世界を描く地誌－ローカルからグローバルへ』古今書院，pp.187-200.

西川大二郎（2000）：地域研究と地誌を結ぶもの－再び地誌学を検討する．熊谷圭知・西川大二郎編：『第三世界を描く地誌－ローカルからグローバルへ』古今書院，pp.231-256.

松本博之（2000）：トレス海峡諸島の地域社会－植民地システムと住民．熊谷圭知・西川大二郎編：『第三世界を描く地誌－ローカルからグローバルへ』古今書院，pp.109-130.

森日出樹（1997）：インド・西ベンガル州における農村開発政策と社会・政治変容－左翼戦線政権下の1グラム・パンチャーヤト区の事例から．アジア経済，vol.38 (8)，pp.39-71.

Ashcroft, B., Griffiths, G., and Tiffin, H. (1998): *Key Concepts in Post-Colonial Studies.* Routledge, London, 275p.

Balla, G. S. and Singh, G. (1997): Recent development in Indian agriculture: A state level analysis. *Economic and Political Weekly,* vol.32 (13), pp.A2-A18.

Breman, J. (1993): *Beyond Patronage and Exploitation: Changing Agrarian Relations in South Gujarat.* Oxford University Press, Delhi, 399p.

Breman, J. (1997): The village in focus. Breman, J., Kloos, P., and Saith, A. eds.: *The Village in Asia Revisited,* Oxford University Press, Delhi, pp.15-75.

Chakrabarty, D. (1989): *Rethinking Working-Class History : Bengal 1890-1940.* Oxford University Press, Delhi, 245p.

da Corta, L. and Davuluri Venkateshwarlu (1999): Unfree relations and the feminisation of agricultural labour in Andhra Pradesh, 1970-95. *The Journal of Peasant Studies,* vol.26(2/3), pp.71-139.

Escobar, A. (1995): *Encountering Development: The Making and Unmaking of the Third World.* Princeton University Press, Princeton, 290p.

Fuller, C. J. (1977): British India or traditional India: An anthropological problem. *Ethnos,* vol.42, pp.95-121.

Fuller, C. J. (1989): Misconceiving the grain heap: A critique of the concept of the Indian jajmani system. Parry, J. and Bloch, M. eds.: *Money and the Morality of Exchange,* Cambridge University Press, Cambridge, pp.33-63.

Fuller, C. J. (1997): Introduction: Caste today. Fuller, C. J. ed.: *Caste Today,* Oxford University Press, Delhi, pp.1-31.

Gupta, A. (1999): *Postcolonial Developments: Agriculture in the Making of Modern India.* Oxford University Press, New Delhi, 409p.

Harriss, J. (1991): A review of research on rural society and agrarian change in south Asia. *South Asia Research,* vol.11(1), pp.17-39.

Harriss, J. (1992): Does the 'depressor' still work? Agrarian structure and development in India: A review of evidence and argument. *The Journal of Peasant Studies,* vol.19(2), pp.189-227.

Harriss, J. (1994): Between economism and post-modernism: reflections on research on 'agrarian change' in India. Booth, D. ed.: *Rethinking Social Development,* Longman, London, pp.172-196.

Inden, R. (1990): *Imagining India.* Basil Blackwell, Oxford, 299p.

Kapadia, K. and Lerche, J. (1999): Introduction. *The Journal of Peasant Studies (Special Issue on Rural Labour Relations in India),* vol.26(2/3), pp.1-9.

Lerche, J. (1995): Is bonded labour a bound category?: Reconceptualising agrarian conflict in India. *The Journal of Peasant Studies,* vol.22(3), pp.484-515.

Mayer, P. (1993): Inventing village tradition: The late 19th century origins of the north Indian 'jajmani system'. *Modern Asian Studies,* vol.27, pp.357-395.

Platteau, J.-P. (1995): A framework for the analysis of evolving patron-client in agrarian economies. *World Development,* vol.23(5), pp.767-786.

Rudolph, L. I. and Rudolph, S. H. (1969 (1967)): *The Modernity of Tradition.* Orient Longman, Hyderabad, 306p.

Scott, J. C. (1976): *The Moral Economy of the Peasant: Rebellion and Subsistence in Southeast Asia.* Yale

University Press, New Haven and London, 246p.
Scott, J. C. (1990 (1985)): *Weapons of the Weak : Everyday Forms of Peasant Resistance.* Oxford University Press, Delhi, 389p.
Sharma, U. (1999): *Caste.* Open University Press, Buckingham, 105p.
Williams, G. (1997): State, discourse, and development in India: the case of West Bengal's panchayati raj. *Environment and Planning A,* vol.29, pp.2099-2112.

Rethinking Social Changes in Rural India: Beyond the Dichotomy of 'Tradition' and 'Modernity'

Hideki MORI

Social changes in so-called Third World societies have often been seen in terms of 'modernization' or 'development', with social 'development' being judged by the degree of Western-style 'modernization' to which they achieve. In this scheme of development, 'traditional' or 'indigenous' social institutions or values are declining or vanishing as a result of so-called 'modernization,' and phenomena contradictory to Western-style 'development' are seen as the remnants of traditional or indigenous culture and society. This kind of Euro-centric viewpoint of development has kept the Third World 'behind' us and has produced power relationships between so-called 'developed' countries and the Third World. The same may be said, no doubt, of our consideration of rural Indian societies. The purpose of this paper is to present an alternative way of looking at social changes in rural India by rethinking the scheme of development from the 'traditional' to the 'modern'. Certainly, some aspects of changes in rural India, such as the increase of agricultural productivity resulting from technological innovation, the dissolution of traditional agrarian relationships (or patron-client relationships), and the democratization of rural politics might be seen as a process of development from a 'traditional' to a 'modern' society. However, phenomena which are contradictory to such a 'development' process — i.e. the reconstruction of patron-client relationships or the villagers' expression of values or ethics based on a 'traditional' community (or moral economy) — have, in fact, been recognized in the very process of development.

Moreover, rural peoples' consciousness of class relations or their discourse and practice in rural politics may often show a mingling of the traditional and modern. By paying attention to subjective human actions, I will present a way of understanding such phenomena without accepting the essentialism which has sustained the dichotomy between traditional and modern. The 'traditional' would not necessarily be what remains after modernization. Rather, it can be articulated, or emerge, as a result of the adaptation or resistance of rural people to social changes. I also maintain that the

mingling of the traditional and modern should not be analyzed from the essentialist viewpoint that tries to discriminate between elements of the traditional and those of the modern. Rather they should be understood as the hybridity of traditional and modern, which has characterized the postcolonial conditions in the Third World. These attempts to present an alternative way of understanding social changes can lead us to question power relations between the developed countries and the Third World, which have been maintained by the discourse of development, or by colonial discourse.